

「1988年、フィリピン」

あじびコレクションX 「1988年、フィリピン」展
会期：3月21日(土) - 6月23日(火)
会場：福岡アジア美術館 アジアギャラリー

★もっと知りたい！フィリピンの歴史と日本との交流史★

フィリピンは、約7100の島々からなる島嶼国であり多民族国家です。約30万km²の国土の4分の3以上が山岳地帯で、豊かな森林と河川、農水産物や鉱物資源にも富んでいます。これらの豊かな島々を統合して「フィリピン」と呼ぶようになったのは、16世紀半ばまで遡ります。

スペイン国王の援助のもとに世界一周の航海を企てたポルトガル人探検家のフェルディナンド・マゼランは、1521年にセブ島に到着しましたが、マクタン島の領主ラプ＝ラプに殺害されます。その後、残された部下たちは航海を続け、世界一周を成し遂げたことは有名です。マゼランの到着後、スペイン人は幾度となくフィリピンの地を訪れようとしませんが失敗。ピリャロボス遠征隊がついにレイテ島に到着したのが1543年です。その時から島々を、当時のスペイン皇太子のフェリペにちなんで「フェリペナス」と命名したことから、この名が全諸島に対して用いられ「フィリピン」という名称になったとされます。その後1565年に、ミゲル・ロペス・デ・レガスピ遠征隊がセブ島に上陸し、フィリピンの初代総督にレガスピが就任、スペインによる統治が始まります。

スペインは15世紀から支配下においたラテンアメリカと同様に、フィリピンでも輸出農産物（主に綿、砂糖、煙草など）を生産する大規模農園の開発を推し進め、社会的な階級を急速に整備していきます。それは、スペイン人や華人系の混血者が大地主となる一方で、原住民の多くは労働者になることを意味しました。また、スペイン統治以前のフィリピンでは土着の精霊信仰が生活や文化の基盤にありましたが、スペインによる植民地化と同時にローマ・カトリック教が急速に布教され、フィリピンの人々は、自分たちの伝統文化や世界観に照らし合わせながらローマ・カトリック教を受容していきました（今日では、フィリピンはアジア唯一のカトリック教国）。しかし19世紀末には、植民地支配に反対する運動がフィリピン内部で巻き起こります。フィリピン独立運動の父とされる小説家のホセ・リサールの追放後、労働者階級の知識人たちが反スペインを掲げて武力蜂起した「フィリピン革命」（1896-99年）は多大な死者を出す事態となりました。

その後1898年12月のパリ講和条約締結をもってフィリピンはスペインからアメリカの統治下に置かれることになり、1908年には公立小学校、高等学校、フィリピン大学が設立され英語教育が始まります。このような歴史の流れから「スペインはフィリピンにカトリック教を残し、アメリカは英語教育を残した」⁷とされています。

太平洋戦争に突入した1942年には日本軍がフィリピン群島を占領し、凄惨な戦いが繰り広げられました。結果、膨大な数の犠牲者が出たことはよく知られています。そして太平洋戦争後の1946年7月4日、米比間合意に基づいてフィリピン共和国が誕生します。同時に大統領制、上下両院制議会、二大政党政治を採用することで、フィリピンはアメリカ式の民主主義を取り入れていきました。

〈日本との交流史〉

フィリピンと日本には500年を超える交流の歴史があります。16世紀半ばのスペインによる植民地支配が始まる前からフィリピンと日本は交易を盛んに行ってきましたが、徳川幕府の鎖国政策でいったん途絶え、マニラに形成されていた日本町も消滅してしまいます。しかし明治の開国とともに、フィリピンと日本の交易・交流は復活します。マニラやミンダナオ島を中心に、フィリピンに生活基盤を築いた日本人は約2万5千人に達し、昭和初期までに東南アジア最大の在留邦人社会が形成されました。しかし、太平洋戦争による日本軍の占領により、両国の間には深い傷が刻み込まれました。戦後の1956年には日本と国交が正常化され両国の往来が盛んになります。現在では約27万人ものフィリピンの人々が日本に定住しており、中国、韓国、ベトナムに続いて在留外国人コミュニティとしては4番目の多さになります⁸。また、福岡市内には1,308名のフィリピンの人々が住んでおり、中国、韓国、ベトナム、ネパールのコミュニティ続いて、5番目の多さになります⁹。

註1 大野拓司、寺田勇文編著『現代フィリピンを知るための61章（第2版）』（明石書店、2009年）、35-39章
鈴木静夫『物語フィリピンの歴史「盗まれた楽園」と抵抗の500年』（中央公論社、1962年）、14章
註2 Philippines Graphic <https://philippinesgraphic.net/julie-lluch-marrying-art-with-literature/>
註3 Yuta: Earth Works by Julie Lluch A Retrospective, National Commission for Culture and the Arts, Philippines, 2008, p17-p21
註4 Yuta: Earth Works by Julie Lluch A Retrospective, National Commission for Culture and the Arts, Philippines, 2008, p17-
註5 東京国立近代美術館編『アジアにめざめたら：アートが変わる、世界が変わる1960-1990年代』（展覧会図録）、2018年、p140-p141
註6 福岡アジア美術館、アーツ前編『闇に刻む光—アジアの木版画運動1930s-2010s』（展覧会図録）、2018年、p142-143
註7 大野拓司、寺田勇文編著『現代フィリピンを知るための61章（第2版）』（明石書店、2009年）、p46
註8 法務省「平成30年未現在における在留外国人人数について http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html
註9 福岡市「福岡市よくある質問Q&A」https://www.city.fukuoka.lg.jp/soki/tokeichosa/qa/FAQ2694_3_2_2_2_2.html

1. はじめに

「フィリピンの美術」と聞くと、みなさんはどのような作品を思い浮かべるでしょうか？もしかすると、キリスト教と土着文化が融合したマリア像や宗教画などを真っ先に思い浮かべるかもしれません。このコーナーでは、『あじびコレクションX』の第一弾として、1988年にフィリピンで制作されたふたつの作品を紹介し、それぞれの表現技法と背景となる社会状況に焦点をあてることで、ふたつの作品からみえてくるものを探ります。

2. ピープル・パワー革命（1980年代のフィリピン）

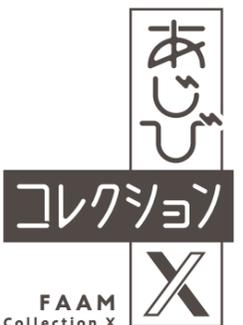
太平洋戦争後、アメリカ・ソ連の冷戦の影響で多くのアジアの国々が深刻な軍事対立や独裁政権に苦しみました。フィリピンでは、1965年に大統領となったフェルナンド・E・マルコスが、国内インフラの整備に力を入れ、1969年に再選を果たします。しかし、選挙戦での乱費などにより高インフレを招いたことで農村地帯から都市部への人口流出が加速、都市部では恒常的な失業者による貧困層が生まれていき、その不満は農民たちの対立抗争を招き社会不安が広がっていきました。その後、1965年から20年間におよぶ開発独裁に突き進んだマルコスは、1972年に戒厳令を公布。不満をあらわにする民衆の要求に対して強権的な態度を示し反対勢力への弾圧を続けました。1983年に起きた、反マルコスのリーダーであったベニグノ・アキノ・ジュニア元上院議員がマニラ国際空港で暗殺された事件は、さまざまな階層の民衆の怒りを表面化させ、大規模なマルコス大統領の退陣運動を導き出しました。1986年2月22日に起きたエドゥサ革命（通称ピープル・パワー革命）では、フィリピンの真の民主化を求める市民たちが、マニラ中心部でデモや集会、兵士に花束を渡す行動を起こし、その様子がマスメディアを通じて放映され、世界中に強烈な印象をあたえました。マルコス政権はこの革命によって崩壊し、暗殺されたベニグノ・アキノ・ジュニア元上院議員の妻コラソン・アキノ氏が、フィリピン初、アジア初の女性大統領として就任し、フィリピンの民主化は市民によって成し遂げられたのです¹。

このコーナーで紹介するふたつの作品も、まさに1980年代のフィリピン社会の激動の中から生まれたものなのです。



本展出品作品

ジュリー・ルーク [フィリピン] 《玉ねぎを切るたびに泣いてしまう》(1988年) 福岡アジア美術館蔵 (左)
レオニーリョ・オルテガ・ドロリコン [フィリピン] 《統一戦線》(1988/2008年) 福岡アジア美術館蔵 (右)



FAAM
Collection X

3. ジュリー・ルークとは？

ジュリー・ルークは、1946年にフィリピン南部ミンダナオ島のイリガン市で生まれました。カトリック系大学としてアジア最古の聖トマス大学で哲学と英文学を専攻し1967年に卒業。1969年には、同大学で学んだフィリピン人画家のダニー・ダレナと結婚し、3人の娘を授かります（長女のサリ・ダレナは映画監督として、次女のアバ・ダレナは彫刻家として、末娘のキリ・ダレナは国際的な美術家として活躍しており、キリ・ダレナは当館の所蔵作家でもあります）。

1971年、25歳のルークは粘土の素焼きであるテラコッタの制作実演のテレビ番組を見たことから、そのなめらかで繊細な質感に惹かれテラコッタの作品制作を決意し、彫刻家としてのキャリアをスタートさせます。² また、1972年に描いた初期の絵画《自画像》【図1】は、後の制作のヒントになる重要な作品となります。そこには、朝5時にベビーベットの横に座わり、夫を待ちながら悲しげに絵を描いている妊娠したルークが描かれています。この絵は当時患っていた鬱病の治癒行為として描いたと、ルークは語っています。³ また、ルークはこの時期から「作家であること、女性であること、母であること、妻であること」の境界を行き来しながら自分自身のなかで葛藤を続けていたと語っています。⁴

その後1977年に、シニングカマリグ・ギャラリー（ケソン市）で初個展を開催し、女性のお尻の形を連想させるハート型のテラコッタにサボテンのような棘が生えている官能的な抽象彫刻を発表。鮮烈なデビューを果たしました。以降、写実的な人物塑像を中心に、テラコッタを用いた作品制作を本格的に始めました。そして、ピープル・パワー革命が起きた翌年の1987年には、フィリピン初の女性芸術家グループ〈カシプラン（女性の芸術と新しい意義という意味）〉に結成メンバーとして参加します。〈カシプラン〉は、マルコス時代以降にジェンダーの意識が急速に高まったことから生まれたフィリピンの女性グループのなかでも、最も影響力のあるグループとして知られています。



【図1】
ジュリー・ルーク
《自画像》、1972年、作家蔵
出典：Yuta: Earth Works by Julie Lluich A Retrospective,
National Commission for Culture and the Arts, Philippines, 2008

4. 女性の地位復権とテラコッタ

1988年に制作された《玉ねぎを切るたびに泣いてしまう》は、1989年に開催された『第3回アジア美術展』（福岡市美術館）に出品された後、当館の所蔵作品となりました。

本作は、台所に立つ女性の瞬間を捉えており、題名からもわかる通り、料理中に玉ねぎを切ることにかこつけて涙を流している作者自身を表した作品で、台の上に置かれている鶏、卵、野菜などは、すべて本物と見まがうほど写実的に作り込まれています。女性が台所でひっそりと泣いている姿を写実的に表現することで、家庭内における女性の役割や苦悩、男性中心のフィリピン社会の現実が浮き彫りにされています。本作は、《自画像》【図1】と重なる部分が多くあり、作者のなかで「女性であること」が継続的に問われていることがわかります。

また、ルークの作品においてテラコッタは重要な意味を持つ素材でした。陶芸の一種であるテラコッタは、柔らかく官能的な質感を表すことのできる特徴を持ちますが、石彫などの伝統的な彫刻素材とは区別され、日用品（食器や建材）などに使われてきた歴史があります。ルークはテラコッタの扱われ方を、男性中心の社会の中で周辺に置かれてきた女性の地位と重ねていたのかもしれませんが。

5. レオニーリョ・オルテガ・ドロリコンとは？

レオニーリョ・オルテガ・ドロリコンは、1957年にフィリピン南部ミンダナオ島のスリガオ・デル・スールに生まれました。1976年、19歳の若さでフィリピンの芸術家グループ〈カイサハン〉に参加したのち、1992年にフィリピン大学ディリマン校を修了。その後は大手新聞社マニラ・タイムズに勤務しながら風刺画や版画作品を発表してきました。

若きドロリコンが参加した〈カイサハン〉とは、「連帯」を意味する言葉で、1976年にマニラで結成されました。1942年に毛沢東が行った『延安文芸講話』に強い影響を受けたメンバーたちは、「芸術の目的は民衆志向であるべきであり、またナショナル・アイデンティティの形成には芸術が不可欠である」⁵ との宣言を掲げ、活動を始めました。〈カイサハン〉は、美術展はもちろんのこと、フィリピンにおける社会政治的問題をテーマにしたワークショップやレクチャーなどを実施し、さらには路上や都市空間などの公共空間に作品を展開させる試みを行いました。この〈カイサハン〉への参加が後の作家活動に大きな影響を与えたとドロリコンは語っており、「芸術を社会に対して意義ある変化をもたらす手段として追求していくことを決心した」という言葉を残しています。⁶

6. 民主的な技術としての版画

フィリピンにおける版画の歴史はスペイン植民地時代までさかのぼり、主にキリスト教への改宗を促す出版物が始まりとされています。その後、18世紀の銅版画や石版から20世紀の写真技術まで、新しい複製技術が取り入れられると同時に、フィリピンの版画は宗教的な内容から世俗的な内容へと移行していきます。また、1898年に始まるアメリカ植民地時代には、新聞、雑誌、刊行物に挿絵や風刺画が描かれ始め、それらは政治的なメッセージを届けるツールとなっていきました。

ドロリコンは、1986年のピープル・パワー革命を機に版画制作に打ち込み、靴の製造が盛んだマリキナ市付近で手に入れた工業製品を用いて、1980年代末まで版画制作を続けました。版画を選んだ理由は、安価な素材と簡便な技術によって一度に多くの枚数を刷ることができ、人々が手にとりやすい点が民主的であると考えたからです。〈カイサハン〉の思想と中国木版画の影響を受けたドロリコンの作品にはたくましい農民が劇的に、また英雄的に描かれており、特徴となっています【図2】。本作《統一戦線》は、1974年にフィリピン共産党（CPP）の指導の下に結成された、統一戦線（社会改革など一定の政治的目的のために活動する共同体）のメンバーと思われる7人の農民の拳を振り上げる勇姿を描き出しています。



【図2】
レオニーリョ・オルテガ・ドロリコン
《ブルジョア階級の墓掘り人》、1989年
福岡アジア美術館蔵

7. ふたつの作品から見えてくるもの

1988年は、ピープル・パワー革命後の新しいフィリピン社会の幕開けの年でした。アジアのなかでもいち早くジェンダー意識が高まったことを背景に、女性であることを問い直すジュリー・ルークの作品と、社会変革を目指し、社会の周縁で権力と闘う勇ましい男性を描いたレオニーリョ・オルテガ・ドロリコンの作品を並べることで、「1988年、フィリピン」の情景が鮮明に浮かび上がってくるようです。また、このふたつの作品および作家同士の直接的な関係性はありませんが、人間から湧き出る情念をリアルに表現している点や、伝統的な主流の美術技法ではない技法を選択している点、そして女性や労働者という社会の中で周辺に置かれてきた人々に寄り添う作者の姿勢が共通していることがわかります。